

みどりの

題字 寺門光輝

みどりの第95号

発行所 茨城キリスト教大学
茨城県日立市大みか町
6丁目11番1号
発行者 東海林 宏司
編集 地域・国際交流センター

大学二号館について

文学部 児童教育学科 教授 佐藤 希久雄

二〇二五年十一月初旬、長く続いた重機の音が止むと、地上には縄で囲まれたやや細長い空き地が現れた。大学二号館の跡地である。

「二号館」というからには「一号館」があった。今の中高のテニスコートの位置に、一九六七年の大学設置によって建てられた。遠目には南側に斜めの壁面を持つユニークな建物である。多くの写真が残されているが、それも東日本大震災の後、二〇一六年一月に解体された。

二号館はその旧一号館に直角をなす位置、東に海を臨む向きに建てられた。「二号館」というからには「一号館」に次ぐ第二の建物かという実はそのではない。現在一〇号館と呼ばれている旧大学図書館が、大学としては第二の建物であった。後述するが、私(佐藤)は今、その一〇号館の二階でこの原稿を書いている。

二号館は一九八二年、当時文学部みの単科大学に第三の学科として児童教育学科が設置されたのに伴い、主に特別教室を納める目的で建てられた。すなわち、一階に家庭科教室、二階に美術教室、三階に音楽教室を置き、二階、三階にはわずかながら普通教室も置かれた。児童教育学科はその設置認可の折、音楽、美術、体育、そして労作教育という、いわゆる「座学」ではない体験的な教育を特色として謳っていたため、それ等の科目が空間的にも、また時間的にも優遇されていたように思われる。



さて、二号館はそのような比較的限られた領域の教室が置かれていたため、それぞれの階の「主あるじ・

ぬし」を容易に挙げることができる。一階、家庭科教室の最初の主は津田理子先生であった。津田先生は家庭科や小児保健の授業を担当されていたが、医学博士の学位を持つ凛とした女性であった。その後、一九八七年、労作教育の分野を担う岩崎哲郎先生が赴任され、彼が長くこの教室を利用されることになった。

二階には、当初、巻島友治先生が入られた。現在も学長室に飾られている海の絵を描かれた画伯である。巻島先生の退職後、美術科教員として赴任されたのが小林信悟先生。一九九〇年から、二号館解体工事が始まる二〇二五年春まで、長きにわたって二階美術教室の主であった。

そして三階には、美術の巻島先生とともに茨城大学教育学部退官後に招かれた柳橋久先生が音楽科の教員として入られた。当時、体調を崩されていたこともあって、児童教育学科の完成年度を終えた一九八六年春に本学を退職された。そこで学科初の交代メンバーとして赴任したのが私、佐藤である。

私が赴任した当時、まだ「三号館」は計画段階であった。教員の個人研究室は「一号館」の最上階に置かれていたが、児童教育学科の設置によって増えた教員の全員分はまかなえず、音楽室の隣は教育学の岡田典夫先生と畠山祥正先生の共同研究室であった。何しろ音楽室の隣である。さぞ研究の妨げとなったことと思う。音楽好きのお二人には「いつもただで音楽を聞かせてもらっています」と言っていた。

また、ご記憶の方は限られると思うが、私の赴任当時、教授会は二号館三階の音楽室で開かれていた。確かに、学生の授業が行われている普通教室の隣で会議を開くのははばかれるが、三号館の完成まで、全教員が集まって会議を開く場所が他になかったのである。

一九八七年秋、ようやく三号館が完成し、教室の配当に多少のゆとりができた。後年、二階には美術教室のバックヤードが確保され、三階では一時大学院(一九九五年設置)のための院生研究室が置かれたりしたが、やがて三階全体を音楽分野で使用することができるようになり、ML(ミュージック・ラボラトリー)を設置し、ピアノ実習をクラス単位で行うことができるようになった。

この二号館、建物としていくつかの難はあった。人の動線より何を優先したか、階段は廊下の奥にあった。その階段も面積を節約したため一段一段が狭くて急な、人への優しさに欠けるものであった。また西側に隣接する斜面のせいであろう、一階の湿気はひどかった。棚にカビが生えて、家庭科教室とし

ては使い物にならなかつた。梅雨時の廊下はバケツで水をまいたかのようだった。多くの卒業生にとっては、一階の個人ロッカーも懐かしいものかもしれない。あまりに小さくて大判の本などが入らないと不評ではあったが。なお入口正面にあった陶製の壁画は、残念ながら保存はされなかつた。

さて、竣工後四十有余年、老朽化した建物は順次除却されるのが定めとはいえず、朝夕慣れに場所が取り壊されるのは寂しい。二階美術室はキャンパス南の「デザイン館」に統合されることとなった。一階を利用していた労作教育関係と三階の音楽関係は一〇号館へと移転した。二号館の老朽化に伴い、より古い一〇号館に移転した形ではある。一〇号館はもともと図書館として建てられたため堅固であり、その後の耐震補強も十分に施されているためである。二号館の跡地利用については目下検討中とのことである。私自身は、四角い空き地を見ながらこの大学を去ることになるかもしれないが、やがてこの学園に集う若い人たちにとって有意義な、学びの環境をいし憩いの空間が地上に現れることだろう。それを楽しみにしている。

我が学園の教育理念



茨城キリスト教学園は
キリスト教の精神に基き、
謙虚に真理を追求し、
公正を尊び、真の隣人愛をもって
人と社会に進んで奉仕し
人類の福祉と世界の平和に貢献する
人間の育成を目的とする

グーテンベルク聖書復刻版

学校法人茨城キリスト教学園
キリスト教センター所蔵



11月2日のオープニング：第77回シオン祭実行委員長

第七十七回

シオン祭を終えて

学園祭教職員実行委員長 穂積 訓

二〇二五年十一月二日(日)、秋晴れのもと、第七十七回シオン祭が開催されました。今年のテーマは「うる祭くらいがちょうどいい」。にぎやかさと心地よさ、その絶妙な調和を指して準備を進めてまいりました。

第七十七回の学園祭は日曜日からのスタートとなり、野口チャブレンによる礼拝で幕を開けました。参加者全員が心一つにし、学園祭の成功を祈る穏やかな時間となりました。礼拝後は、大学生による体験型イベントや地

域連携企画、恒例の模擬店や展示がキャンパスを彩りました。ゼミやサークル、NICEなどの有志団体が工夫を凝らした新しい企画もあり、来場者の皆さまに大学ならではの多様な体験を楽しんでいただけたものと思います。さらに、毎年人気のお化け屋敷では、学生たちのアイデアが光り、スリル満点の体験に多くの来場者が列をなしました。また移動動物園では、ウサギやフクロウなどたくさん動物たちとのふれあいや餌やりを小さな子どもから大人まで楽しみ、心温まるひとときとなりました。

二日目、大学生・教職員の活動だけではなく、中学校・高等学校の生徒による展示発表や模擬店も大いに盛り上がりました。各クラスや部活動が日頃の学習や活動の成果を発信し、定番の軽食やスイーツ、オリジナルメニューなど、バラエティ豊かな模擬店が並びました。多くの来場者が生徒たちの工夫や熱意に触れ、交流を深める場となりました。また認定こども園の子どもたちによるかわいらしい作品展示は、訪れた方々の心を和ませてくれました。さらには短期大学五十周年時のタイムカプセル開封式が開催されるなど、幅広い世代が楽しめる学園祭になりました。

今年のお笑いライブでは、「ひつじねいり」「三四郎」「流れ星☆」(敬称略)の三組が出演し、会場は大きな笑いと歓声に包まれました。学園祭の最後には花火が打ち上がり、学生・来場者ともに、非日常のひとつときを存分に味わうことができました。

最後に、シオン祭の運営にご協力いただいた皆さま、ご来場いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。今後も「うる祭くらいがちょうどいい」——そんな心地よいにぎわいを大切に、よりよい学園祭を目指してまいります。

第七十二回

茨城キリスト教学園

英語コンテスト

文学部 現代英語学科 助教 野田 知子

二〇二五年十月十七日(金)、本学において「第七十二回茨城キリスト教学園英語コンテスト」を開催いたしました。本コンテストは、皆様のご支援により今年で第七十二回を迎える運びとなりました。これまでご参加いただいた出場者の皆様をはじめ、ご指導やご支援にあたられた先生方、保護者の皆様にご心より御礼申し上げます。

今年度は、高校生プレゼンテーション部門十一名、中学生弁論部門二十三名、中学生ストーリー部門十二名、計四十六名の生徒が参加いたしました。当日、朝早くから会場に集まり、本番に向けて真剣に準備へ取り組む出場者の姿が多数見受けられました。開会式終了後、各部門に分かれて発表を行いました。

高校生プレゼンテーション部門では「Globalization: A Project You Suggest」をテーマとし、グローバルな視点を踏まえつつ地域社会のために取り組める活動について提案がなされました。探究活動等を通じて培った課題発見力や課題解決力、発信力を生かし、またスライド資料にも工夫を凝らしながら、多様なアイデアを英語で発表する姿が印象的でした。中学生弁論部門では、平和や正義、環境問題、さらには自身の経験から得た学びなど、多岐にわたるテーマについて、それぞれが込めた思いを英語で力強く表現していました。また、中学生ストーリー部門は、提示されたストーリー冒頭の続きを創作し、発表する形式で実施いたしました。創作にあたっては発想の独

創性が求められ、また発表においては臨場感を生み出す表現技法が必要となります。出場者一人ひとりが表現工夫を凝らして臨んでいた点が大変印象に残りました。いずれの部門においても、英語の知識・技能のみならず、内容の充実度、創造性、論理性など、多面的な力が問われる大会となりました。

発表後には出場者同士が交流し、英語学習や学校生活、発表内容について活発に意見交換する様子が見られました。和やかな雰囲気の中で表彰式および閉会式を執り行い、本コンテストは盛会のうちに終了いたしました。

限られた準備期間ではございましたが、出場者の皆様がこれまでの学習の成果を十分に発揮され、最良のパフォーマンスを披露されたものと存じます。ご参加いただきました生徒の皆様、ご指導にあたられた中学校・高等学校の先生方、並びに保護者の皆様に厚く御礼申し上げます。来年度も多くの皆様のご参加を、学園一同心よりお待ちしております。



第二十四回 「食のフォーラム」 開催報告

生活科学部 食物健康科学科 教授 梶田 泰孝

二〇二五年十一月二十九日(土)、食物健康科学科主催の「二十一世紀食のフォーラム」が開催されました。栄養や食・健康をテーマとし、広く情報提供を行うことを目的として、学科が開設された二〇〇〇年より始まった本フォーラムは、開催が困難であった年もありましたが、第二十四回を迎えることができました。

本年度は「研究者がつくる管理栄養士の未来」と題し、二名の講師をお招きしました。食物健康科学科では、教員・卒業生によって多くの研究・教育活動がなされています。研究・教育活動を次世代に、その意思とともにつなげていく、さらには管理栄養士の資格を生かし、新たな領域での活躍を願う思いから、本講演を企画いたしました。

最初に本学名誉教授であり、食物健康科学科の開設に尽力された川上美智子先生より講演を賜りました。川上先生は、これまでの研究・教育活動の成果が認められ、二〇二四年度「瑞宝小綬章」を受章されました。演題は「食の教育と研究に魅せられて―五〇年を振り返る―」。ご自身がなされてきた様々な研究・教育活動の成果紹介と、若い研究者への期待についてお話しされました。研究・教育活動を通して人々の健康を願い続ける川上先生の熱いお気持ちを伺うことができました。

続いて、国立研究開発法人国立成育医療研究センター(東京都)の研究者として勤務されている堀江早喜氏より、「食歴から描くライフデザイン―国際栄養の実践から考えるプレコンセプ

ションケア」と題して講演を賜りました。堀江氏は食物健康科学科の第一期生であり、卒業後、独立行政法人国際協力機構(JICA)海外協力隊(栄養士隊員)としてボリビア共和国に赴任されています。帰国後はその経験を糧に学位(公衆衛生学修士)を取得され、現職に至っています。また公衆栄養学関連の学術学会では精力的に発表を行うなど幅広く活躍されています。演題にあるプレコンセプションケアとは、性別問わず、将来の妊娠・出産を見据えて、心身の健康を整える健康づくりのことです。食生活は、妊娠の成立や胎児の発育、母体の健康に大きく影響します。堀江氏はこのケアの推進・普及啓発活動を担っており、ご講演ではその重要性に加え、食事記録(食歴)の大切さ、食歴と健康状態との関連性について、詳しく説明していただきました。

講演には地域の方々をはじめ、管理栄養士・栄養士の業務に携わる方々、高校生の方々を含め一〇〇名超の方々にご参加いただきました。感謝申し上げます。休憩時間には参加者と講師との交流がなされ、和やかな雰囲気での開催であったことは嬉しいかぎりです。

食物健康科学科では今後このような機会を設け、栄養や食・健康の重要性を広く情報提供して参ります。機会がありましたら是非ご参加いただければ幸いです。



第十九回 「IC看護講演会」 開催報告

看護学部 看護学科 講師 角田 智美

看護学科では、二〇二五年十一月二十九日(土)に第十九回となる「IC看護講演会」を開催いたしました。今年度は、看護師でもあり、心理カウンセラーやメンタルコーチとして多方面で活躍されている長谷静香(はせしずか)先生を講師にお迎えし、「今のわたし」にOKを出す―自分をいたわることの習慣―をテーマにご講演をいただきました。講演会の開催に向けては、「私は私、これでいい」と言える人生を目標とし、「心の健康」についてご来場いただいた方々とともに考える機会を目指しておりました。それにより、地域の皆様をはじめ本学の学生や教職員など、おおよそ一六〇名の参加がありました。

長谷先生はご専門である「アドラー心理学」について、自分や相手を勇気づける心理学であることと説明いただき、「勇気づけ」とは困難を克服する活力を与えること、という基本的な考え方をはじめ、そこからアドラー心理学の理論をやさしく解説してくださいました。特に、人とかかわる上で大切なこととして、自分自身を世界でもっとも大切に扱う「自愛」の心持ちや、自分を守るための振る舞いなどアドラー心理学に基づいた考え方を具体的に説明いただきました。また、長い人生を生きていく上でどうにもならない困難に直面した場合、思いどおりにならないことに耐える力である「ネガティブ・ケイパビリティ」を発揮することの重要性を教えてくださいました。そのために、物事に対して白黒つけない勇氣を持つこと、仲間に相談するなど対話をする



こと、今できる小さなことに集中することといった三つのコツを伝授してくださいました。さらに、自分を守るためには頑丈な「心の器づくり」が大切であることを説き、自分の心を勇気のしずくで満たすことが、自分だけでなく周囲の人に対しても微笑みあふれる毎日につながることを強調されました。講演会は終始長谷先生の温かい雰囲気と穏やかなお人柄が表れた和やかな場となりました。

参加者からは、「今の自分をそのまま受け入れて認める、それで良いというメッセージが印象的だった」、「つい自分を後回しにしてしまっているので、まずは自分の心を満たすことが大切だと気づいた」、「できる・できないではなく、『どうありたいか』が大切だと改めて感じた」など、多くの感想をいただきました。

本講演をとおして、人生一〇〇年時代を豊かに生きるヒントを得るよい機会になったと考えます。今ここから実践できる自分だけの小さな一歩が明るい未来を照らすという、大切な気づきをいただいた講演会となりました。

NICE活動報告

文学部 児童教育学科 主任 齋藤 遼太郎



茨城キリスト教大学教育関係者ネットワーク (Network of Ibaraki Christian University Educators)、以下、NICE)は、本学と連携する外邦団体として、二〇二二年四月一日に設立されました。「教育関係の職にある茨城キリスト教大学(以下、IC)の卒業生、教育関係の職に就くことを志望するICの在学生、ならびにICの教職員が、その交流を密にし、先人の智慧に浴してこれを伝え、若き奮闘あればこれを皆で支え、数々の成功と後悔とに耳を傾け、教育の力を真摯に講じて高め、いもって愛する子らの豊かな成長に資する真の専門職団体となること(会則第一条より)を目指して活動しております。毎年八月に総会を

行うほか、年に一回程度オンラインでの勉強会やシオン祭におけるプチホームカミングデーを開いております。二〇二五年度は八月二十三日に総会を開き、十一月二日および三日のシオン祭ではIC教員による珈琲とブラウニーを販売しました。

八月二十三日の総会では、本学の卒業生である會澤先生と小野先生による最先端の教育実践について講義いただきました。今日の教育においては、ICTの活用や郷土愛を育むことが求められています。両先生からつくば市および常陸大宮市における取り組みをご紹介いただきました。

十一月二日および三日のシオン祭では、「NICEな焚火焙煎珈琲とブラウニーのお店」と題し、IC教員による珈琲とブラウニーを販売しました。各日限定一〇〇セットの販売でしたが、想定を上回るご来店があり大盛況でした。また、卒業生や在学生にも多く訪ねていただき、その場で入会いただく方もいらっしゃいました。

AI等の先端技術の高度化や複雑で予測困難な時代の中、学校教育においてはあらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められています。NICEでは大学が拠点となり、卒業生同士や卒業生と在学生、教職関係の大学教職員を繋ぎ、これからの教育に資する活動を続けてまいります。

入会申請は随時受け付けておりますので、入会希望の方は本学ホームページの「卒業生の方へ」から入会申請をお願いしております。



地域防災力を高める公開講座を開催しました

地域・国際交流センター長 宮崎 晶子

昨年度三月十三、十四日、日立市と連携した公開講座「地域のもしにも備えよう」地域防災プログラムを開催しました。東日本大震災から十四年が経過し、災害の記憶が薄れる中、地域住民が自助と共助の重要性を再認識する機会として企画し、二日間で約百十名の方が参加されました。講座は「自分の命を守る」「周りの命を守る」という二つのテーマで構成され、座学と実習を組み合わせた実践的な内容が特徴です。

初日(十三日)は「自分の命を守る」をテーマに、日立市防災対策課に講話と演習を担当していただきました。参加者は災害時の避難行動やハザードマップの活用方法を学び、避難所での備蓄品確認や段ボールベッドの設置を体験しました。実際に手を動かしながら、災害時に必要なものを準備し、「震災を他人事と思っていたが、改めて備えの必要性を感じた」との声も寄せられました。特に、避難所での生活を想定した演習は、災害時に直面する現実を身近に感じさせ、参加者の防災意識を高める効果があったと考えられています。

二日目(十四日)は「周りの命を守る」をテーマに、日立市消防本部と本学看護学部が協力し応急処置や搬送法を実践しました。身近な物を使った骨折固定や複数人で安全に搬送する技術を学び、参加者たちは災害時に役立つ知識を習得しました。さらにDMAT資機材やAEDの展示も行われ、災害現場のリアルを体感できる内容でした。参加者からは「実習が特に有意義」「継続開催を望む」との声もあり、座学だけでは得られない実践力を養う

という点で評価していただきました。

本学は今後も地域に開かれた防災教育を推進し、住民同士が助け合う地域防災力の向上を目指します。災害はいつ起こるかわかりません。行政や専門機関だけでなく、地域全体で取り組むべき課題といえます。こうした取り組みが、問題意識を共有し、行動につながる貴重な機会となればと願っています。

今年度は、二〇二六年三月十二、十三日に「公開講座「地域のもしにも備えよう」二〇二五年度地域防災プログラム」を開催いたします。昨年度同様、一日目は日立市防災対策課にご協力いただき、二日目は本学看護学部共催のもと「共助」をテーマに開講します。詳しくは、左記関連リンクをご参照ください。

今後とも地域とともにある大学を目指し、高等教育機関として学びを提供していきます。来年度も本学の活動にご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

地域・国際交流センター便り

地域交流課

公開講座・聴講生制度他最新情報はこちらから

国際交流課

二〇二六年度ホストファミリーを募集中
詳細はこちら

